

第 50 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2016 年 3 月 18 日

(題字) 湯池 孝先生



ゼミ研修旅行のこと——祇園の夜

日本文学教授 廣木 一人



提案した。

八坂神社はもちろん祇園も夜灯籠、提灯に明かりが入った時間に趣がある。その風情を楽しんでほしいということでもあるが、八坂神社の門の位置に立てば、祇園の町が一望できる、その先には歌舞伎の南座、さらに四条大橋から四条の繁華街。つまり、門前町のあり方を実感してほしいからでもある。

なぜ、土産物屋と祇園の花街が四条通りの延長沿いにあるかを、この門の前で三分間話した。寺社に参詣するということの意味の一面を知ってほしいと思つてのことである。大学生になり、文学を専門に学んでいる者が社会を表面だけで見ていては物事の真実が見えてこない。今回は北野天満宮にも行ったが、この神社であれば上七軒との関係でもある。

巫女と呼ばれた女性、今はアイドル視されるような舞妓がどのよな女性であったかを知らなければならぬ。本当は時衆、四条道場と絡めて中世芸能とこのあたりの土地の関係を話したかったがそれは止めておいた。興味のある人には学校でお話する。

その後、少し時間を取つて、懇望する「ようじ屋」で買い物をしてもらつて、祇園を一周した。これは中学生では来させてもらえないところのほゞで、ゼミ旅行だからこそである。四条通りの南側の花見小路は外国人の観光客で溢れるばかり、なのでしばらく行つて戻つて、北側の巽橋の方に足を向ける。

白川沿いを歩いて吉井勇の「かにかくに祇園は恋し寝る時も枕の下に水の流るる」の歌碑を見て、その辺りの料亭の明かりの下を散策しつつ鴨川に出る。ここには観光客はほとんどいない。鴨川の川岸に立てば、左手の橋のたもとに阿国の像があり、目の前は四条河原、床を川に張り出した先斗町の飲食街が南北に長く連なっているの見える。

その先斗町の小路を三条の方へ

少し歩いて、左に曲がり高瀬川沿いの道に出る。高瀬舟の話をしつゝ再び四条通りに戻り、夕食を先斗町の入り口の角の店で取る。ここは定食のような食事を出してくるので、酒の飲めない学生のいる時にはちょうどいい。その後は大人の時間である。先斗町の洒落た店で歓談する内に京の町が更けていった。

もちろん、昼間は有名な寺社をしつかり廻つた。学生にとつて何が一番印象に残つたか、それは聞きたくもあり、そつと京の思い出として胸の中にとつておいてほしくもある。

第50号 目次

巻頭随筆	二
研究余瀆	三
日本文学会春季大会報告	四
日本文学会秋季大会報告	五
日女生随筆	六
研究レポート	九
研究室探訪	十二
留学体験記	十五
東北ボランティア	十六
インタビュー	十九
院生中間発表に潜入	二〇
夏期集中講義報告	二一
二〇一五年度講義題目	二二
研究室だより・編集後記	二四

生き別れになった漢籍の 再会の日を夢見て

日本文学科助教

遠藤 星希（漢文学）



二〇一五年三月に「国際稀覯本フェア二〇一五」が東京九段下の某ホテルにて開催され、超高額な漢籍が出品されてニュースになりました。出品されたのは柳宗元の『唐柳先生文集』二冊、南宋時代の木版印刷本です。出品者は神田神保町の山本書店でした。そのお値段は何と一億八千万円。なお、この本は完本ではありません。出品目録によりますと、巻十四〜十八、巻二十九〜三十二、外集及び後序

しか存していないとのことでした。

ただ、私はその金額自体にはそれほど驚きを覚えませんでした。宋本の値段としては想定範囲内だったからです。むしろ私が驚いたのは、その内容の方でした。稀覯本フェアの開催に先立ち、オンラインではすでに書影の一部が公開されていたのですが、その一つである巻十四の第一葉を目にした時の衝撃は今でも忘れられません。そこに載っていたのが「天説」という作品だったからです。

なぜこれが驚くべきことなのか、それについては少々説明を加える必要があるでしょう。柳宗元の詩文集は四十五卷本系統と三十卷本系統の二種類のテキストが伝わっていますが、完全な形で残っており、現在通行しているのは四十五卷本系統の方です。三十卷

本系統のテキストはごく一部しか現存しておらず、北京の国家図書館に外集一卷、日本の静嘉堂文庫に巻二十九・三十二と外集のそれぞれ一部をわずかに蔵するのみです。そして「天説」は、四十五卷本では例外なく巻十六に収録されている作品なのです。つまり「天説」が巻十四に収録されている時点で、山本書店の『唐柳先生文集』は、幻の三十卷本である可能性が極めて高くなるわけです。

ここで私は、江戸時代末期の漢籍善本の目録『経籍訪古志』に記録されている『唐柳先生文集』のことを思い出しました。その記録によると、賜蘆文庫に宋本『唐柳先生文集』が所蔵されており、それは元々三十二卷外集一卷のテキストだったのが、当時現存していたのは巻十四〜十八、巻二十九〜三十二及び外集のみであったことが分かります。太田亨氏の研究によると、この賜蘆文庫本は後に文庫の中で二つに分かれ、一方は静嘉堂文庫に伝わり、もう一方は浅野梅堂の漱芳閣に移った後に行方不明になったとのこと。ところで山本書店が出品した『唐柳先生文集』には蔵書印がいくつか捺

されていますが、その中の一つは何と「漱芳閣蔵書」。つまり今回出品されたのは、静嘉堂文庫本と離れ離れになった後、行方不明になっていた賜蘆文庫本だったのです。

こうして一億八千万円の漢籍の素性が明らかになりました。ところでこの本はその後どうなったのでしょうか。真偽は不明ですが、まだ買い手は見つかっていないという風の噂を耳にしました。とすれば、今後この本がどのような運命を辿るのが気になるでしょう。私個人の身勝手な願望をいえば、ぜひ静嘉堂文庫の手に渡って欲しい。生き別れになった兄弟が再会し、一緒に暮らせる日が来るとしたら、何と素晴らしいことではないでしょうか。

古い書物が私たちの時代になおも存在しているのは当たり前のことではありません。一冊一冊の書物にそれぞれのドラマがあり、書いた人間、刊行した人間、伝えた人間が存在し、そのどれか一つも欠けなかったおかげで、私たちはその書物を今も読むことができ、そこから知識や感動を得ることができます。残された文化遺産を次の世代に伝えていくこと、今

回出品された『唐柳先生文集』は、
その大切さを私たちに訴えている

ように思えてなりません。

日本文学会春季大会

講演：マイケル・ワトソン先生（明治学院大学教授）

「翻訳における韻律への挑戦」

——『平家物語』翻訳史——

報告 博士後期課程 杉山 和也



二〇一五年四月二五日に催された日本文学会春季大会では、明治学院大学教授、マイケル・ワトソン先生による「翻訳における韻律への挑戦——『平家物語』翻訳史——」と題した講演会が行われた。内容を簡単に紹介してみたい。

『平家物語』（以下『平家』）は、全訳・抄訳を含めるとこれまでに

フランス語、イタリア語、スペイン語、英語、ドイツ語、ロシア語、チェコ語、中国語、韓国語といった世界の諸言語に翻訳されており、既に一四〇年の翻訳史があるという。古典テキストを直接読み解こうとする我々にとっては意識が希薄になりがちなことだが、日本の作品を享受しているのは何も日本だけではないのである。それでは世界諸国では異文化としての日本の古典作品はどのような形で翻訳・享受されてきたのか。

を整える弱強格 (iambic)、強弱格 (trochee) など、英語の文芸における韻律 (rhythm) の表現を用いて訳されるなどしてきた。すなわち、異文化としての日本の古典を英語圏の文学作品として違和感の無いように同化作用 (domesticating) を施した翻訳である。また他方では、特に韻律表現を用いずに、訳文について二行書き、字下げ、イタリック体という形態を採り、そのレイアウトによって原文が詩歌であるということを示す手法。或いは五行書きという形を採り、五七五七七という日本語の韻文を意識させた翻訳もある。具体例としてはサドラーが、一九二二年の『平家』の翻訳で前者の手法を、一九二八年の『平家』の翻訳では後者の手法を採っている。すなわち、これらの翻訳では異文化を異文化として意識させる「異文化作用 (foreignizing)」が施されている。日本の古典作品はこのように、同化作用と異文化作用の狭間で種々の創意工夫が凝らされつつ様々に翻訳されてきた訳である。

として翻訳されてきた。一八九九年に抄訳したアストンも、『平家』では詩的方法 (poetic manner) への志向が認められはするものの、規則正しい韻律 (metre) と詩的な語法 (diction) は守られていないとしており、以後もこうした認識に則った形で翻訳が為されてきた。ところが、近年公刊されたロイヤル・タイラー訳の『平家』（二〇一二年）では斬新な試みが為された。散文ではない形で翻訳されたのである。翻訳にあたって韻律表現を用いるのみならず、『平家』演誦の楽譜である平家譜本『平家正節』に依拠して、その大旋律の型を西洋の音楽概念、アリア (song)、レクタティーボ (recitative)、会話 (speech) として読み替え、文体やレイアウトの工夫を以てそれを示す形を採っている。元ハーバード大学教授ジェイ・ルービンは書評誌『タイムズ文芸付録』に於いて「荘厳で重々しい原文の韻律が英語として蘇った」と最高の賛辞を送っている。文体的にも形態的にも『平家』翻訳の一つの達成をここに認めることができそうである。

我々は作品を「日本文学」とし

てのみ見てしまいがちである。本講演はその認識を改めさせられるものであった。「日本」という枠組みも「日本語」という言語も取り払った上で改めて作品と対峙した時、それでもなお作品価値を認め

られるとするならば、それは何故で、その価値とは一体何であるのか。翻訳の諸相を踏まえて世界文学という観点から捉え直してみると、それまでとは違った作品価値を認めることができるのかもしれない。

日本文学会秋季大会

講演・廣木一人先生（青山学院大学教授）

「文明四年（1472）、五年の美濃革手城下

—文学者たちの交叉点—

報告 博士後期課程 寺尾麻里



「さる二〇一五年十一月二十一日、日本文学会秋季大会が開催された。春季・秋季の二回制が復活したのは実に十余年ぶりのことで

ある。この記念すべき大会の講演には、本学出身で本学文学部日本文学科教授である、廣木一人先生にご登壇いただいた。題は、「文明四年、五年の美濃国革手城下—文学者たちの交叉点」。

廣木先生のご専門は中世文学であり、なかでも連歌を中心に研究なさっている。連歌は、人と人との交流のうちに営まれる座の文芸であり、中世という時代にはこの連歌が隆盛していた。今回のご講演では、革手城下という土地を

一例として、室町後期における日本社会と文学とのありかたについて、お話しいただいた。

文明五年（一四七三）五月、当時の摂政関白であり、室町期を通しての代表的な文化人であった一条兼良は、応仁・文明の乱で疲弊した都を逃れて滞在していた奈良を出て、革手城下を訪れた。このとき兼良が美濃国守護代である斎藤妙椿によって歓待を受けたことが兼良による紀行『藤河の記』に記されており、そこから、この城下町では歌の披露や詩の会や連歌会、舞楽や猿楽といった、様々な文学や芸能が繰り広げられていたことがわかるという。

この時期は、応仁元年（一四六七）正月に応仁・文明の乱が始まって都が壊滅状態となり、文明四年（一四七二）正月に和睦の動きが出、翌五年（一四七三）三月に西軍の将である山名宗全が、五月には東軍の将である細川勝元が死去し、終結の目処が立ってきた、そのような頃である。兼良は細川勝元の死去の報を革手城下で耳にしている。これから戦国時代と呼ばれる全国的な動乱が始まる、そのような時期でもある。

革手城は守護所があった美濃国の中心地であるが、この国は東国と都とを結ぶ要所であり、戦路上・経済活動上の重要な国であった。そして当時、守護大名は領国におらず京都に住まわせられており、美濃国を実質的に統治していたのは守護代である斎藤氏であった。なかでも妙椿は応仁・文明の乱の帰趨を左右するほどの実力を持っていたといい、なおかつ、彼は大変な文学愛好者であった。この時期の前後には数多くの文学者や公家がこの土地を通過したり滞在したりしており、妙椿は当代一流の文学者である連歌師専順を庇護し、宗祇を自国に迎えて交流を持っている。『藤河の記』に見える、兼良の訪れを妙椿が歓待した、ということにはこのような背景があったのである。

それではなぜ、妙椿は兼良を迎えたか。それは、第一には公家の最高権力者を迎えることによる伝統的な権威付けという政治的な面もあるが、それだけでなく、それを迎えうるほどの文学的な素養があったのだ、と廣木先生は強調する。統治者の資格として文化的な素養が問われた、ということだ

ある。無骨な、戦争のための城下町というイメージがある。しかしそこには、豊かな文学的な生活があった。そこを見落としては室町時代が見えてこない。このように革手城を一例としての話だけでも、政治と文化、社会と文学が交又して時代が動いていたことがわかるのである。

文学というものの意義が強く問われる昨今である。人文科学は人間自身を問う領域であり、なかでも文学に携わる我々は、文学とは何か、人間とは何かという問いに常にアプローチしてきたはずである。考えなくなった輩はただの輩ですらない。今回のご講演、そして日文大会を契機として、文学研究を益々盛んにしていきたい。

日女生随筆

「大学院に進学して」

博士前期課程1年 小川 剛央

「大学院って就職をしたくない人がモラトリアムで行くところ

しょう」

ふとした会話の中でよく耳にする言葉ですが、実際そのように考えている人も多いのではないのでしょうか。しかし、私の直面した大学院での生活は決してそのような遊び半分で通用するようなものではありませんでした。

私は、同じ青山の日本文学科から進学することを決めたので、大学院の生活といっても目新しいことはありませんでした。むしろ、学部から進学したことで大学院の生活はその延長にあるとすら考えていました。今振り返ってみると甘すぎたその考えは大学院のゼミに臨んで脆く崩れ去ることになりました。ゼミの発表は、日々張りつめた空気の中で行われます。定説とされる学説や研究史の状況を把握していることなどは当たり前で、その枠にとどまるような研究および発表をしても意味はありません。従来の定説を打ち破るような解釈を生み出すのは容易ではなく、作品と論文を読むことに没頭する毎日です。ゼミの発表には数カ月前から準備して臨むこともあります。発表に際してまた別の問題点が見えてくるといったこと

の繰り返しになります。「その研究をして何の意味があるのか」というのは土方先生がしばしば口にされる言葉ですが、私はこの言葉を思い出すたびに緊張を覚えます。自分の考えたことが研究史上どのような意味を持つのかを理解し、準備に数カ月かけて発表し、また新たな問題点を発見し解釈の糸口を模索する。大学院での学びはこの繰り返しになります。

そのような緊張感を持った中で学びとなりますが、大学院に進学してよかったことももちろんあります。自分がいかに日本文学について無知であったかということ。それまでは研究史や定説となるものの認識が曖昧で自分の中で確かな知識として消化することができずにいました。私は将来、高等学校の教員になりたいと考えていますが、それまでの自分では知識の切り売りのようなことしかできなかつたと思います。その意味で、今後自分の力で日本文学を学ぶための基礎を培うことができよかつたと思っています。ここでの学びは必ず今後の私自身を支える力になってくれると確信しています。

就活体験記

4 D 飯嶋 菜穂

二〇一六年度採用から選考時期が遅くなることで不安を抱いた中でスタートとなりました。選考時期の後ろ倒しにより、三年生の夏のインターンが重要だということとを耳にしたので、私も参加しました。インターンはグループワークが中心だったので、デイスカッションなどが苦手だった私は、周りの学生のレベルの高さに就活本番への焦りや不安を抱き始めました。また、苦手な面接やグループディスカッションの対策講座が所属していた部活動の練習時間と重なっていることが多く、練習中にゼミナーに向かうスーツ姿の同級生を見てさらに焦るということもありました。けれども、日程の合う大学のゼミナーに参加したり、キャリアセンターに通ったり、冬休みにもインターンや、ゼミナーに参加して人と話す機会を増やし、補うようにしていました。三月になってからは大学で行われていた説明会で幅広い業界の会

社説明を聞き、OG訪問も始めました。四月からは業界や会社をしぼって興味のある会社のセミナーに何度も行き、そこで得たものを志望動機に盛り込みました。

八月からは本格的に面接が始まりましたが、一次や二次選考で連絡が途絶えてしまう状態が続き本当に辛い日々でした。何がいけなかったのだろうかと思われ、その日聞かれたことを振り返りました。やっと面接が進んだ第一志望の会社に最終選考で内定を貰うことができず、先が見えない状態で、内定なんてもらえないのだろうかと思われ、どん底状態でした。しかし、私らしさを評価してくれる会社に出会い、八月の三週目に立て続けに内定を頂くことが出来ました。

就職活動が終わって思うことは、とても一人では乗り越えられなかったということです。例えばESは何度もキャリアセンターの方に見ていただき、自己PRは早い段階で完成させることができました。また、OG訪問やセミナーで様々なアドバイスを貰ったり面接練習をしていただきました。面接がうまくいかなかった時は、同

じく就職活動中の友達と携帯で連絡を取り合い励まし合っていましたし、キャリアセンターの方にも励ましていただきました。

本当に多くの方の支えによって就職活動を終えることができたと思います。

就活体験記

公務員試験

4C 結城 美帆

公務員は一般の就活とは少し違います。メインは勉強です。もちろん企業研究と同じように自治体研究もしますが、まずは勉強、一番大変なのが勉強です。試験科目は20科目以上あり、それに加えて小論文、自治体研究、ES、面接、集団討論があります。ですから大抵は3年生の4月から、遅くても3年生の9月からは勉強を始めるという間に合いません。

私は2年生のときに様々な会社の説明会を聞きに行き、どうも自分のやりたいこととマッチせず悩んでいたとき、公務員という選択肢に出会いました。そして3年生の4月から予備校に通い始めまし

た。始めのうちは公務員試験がどのくらい大変なのかもイメージできず、予備校に行つて講義を聞くだけの生活を送っていました。しかし夏に予備校のテストを受け、結果を目の当たりにし、このままじゃ到底合格なんてできない、と思い真剣に勉強を始めました。少しずつ午前中から勉強する習慣をつけ、年内には主要科目の勉学的処理とミクロ経済学、マクロ経済学、憲法の勉強は一通り終わらせようと努力しました。

正直、公務員試験は一般の就活よりも長い時間が必要です。その分周りの皆よりも早めに就活が始まります。私だって友達と遊びたい、でも勉強しないと試験に合格できない、就職できない、そんな気持ちと戦いながら毎日過ごしていました。模試の結果は一向に良くならず、本当に力になっていくのか不安に思うこともありましたが、予備校でライバル達の勉強している後ろ姿を見るたび、皆頑張っているのだから私だって頑張らなきゃ、と思ひひたすら勉強していました。年明け2月くらいからは朝6時から夜10時まで勉強しました。模試では一度も合格点に

届かず不安に思うこともありましたが、それでも試験終了の合図が鳴るまで絶対諦めない、1日1点、2%に入る順位で合格でき、最終的には第一志望の自治体から内定のお電話を頂くことができました。

就活は「楽しんでる勝ち」です。自分の目指すところに向かって妥協せずやるだけのことをやる、そうすれば必ず思いは結果として現れます。例えば上手いかななくても、頑張つていけば道は開けます。就活は十人十色。自分の就活を思い切り楽しんでください！「今頑張れない奴は将来だつてどうせ頑張れない」私は自分にそう言い聞かせて辛いときを乗り越えました。皆さんも頑張ってください。応援しています。

教育実習を終えて

4C 杉山 真里亜

今回の教育実習では、HRを兼ねて中学3年生を担当させて頂き、主に松尾芭蕉の『奥の細道』について授業を行いました。始めは不安や緊張もありましたが、生徒と

のコミュニケーションの中で、いつの間にかそうしたものは無くなりました。特に教育実習初日は大変緊張していましたが、実習担当の先生から「教壇に立つ人は、生徒から見たらもう「先生」。それに、生徒の方もどんな先生が来るのか、緊張しているんだよ。」と言われ、深呼吸をし、決意新たに明るく笑顔で、教室の扉を開けたことを覚えていきます。

また、自分自身が中高生時代に見ていた「先生」と、教員を志す立場となり見る「先生」は、やはり違ったものだと感じました。教師としての資質や技能など、多くのことを学ばせて頂くことができました。

3週間の実習を無事に終えることができたのは、生徒指導や授業などに対して毎回改善点を指導してくださった指導担当の先生を始め、多くの先生方のご指導があったからこそだと思います。また何より、よい仲間にも恵まれ、実習生同士、辛いことも嬉しいことも互いに助け合いながら貴重な経験をさせて頂くことができました。

そして、今回の教育実習を通して一番得た物は、「教員になりました

いという想い」を改めて強く持ったことです。もちろん「教員」の予想以上の作業量の多さや、大変さも改めて目の当たりにしてきました。しかし、それ以上に現場の先生方の姿や生徒との関わり合いの中で、教師のやりがいを感じる事ができました。

「子どもが沢山の夢や目標を持ち、自らの未来を主体的に切り拓いていく。」その為に一番近くで、触れ合いの中で見守りながら成長を助けていけるなら、私にとってこれ以上の喜びはありません。

来年の四月から、私は高校教師になります。私自身、自分の将来の夢の扉の入口までやって来ました。子ども達にも沢山の夢や目標を持たせてあげられるような教師になりたいです。この教育実習での経験を「初心」として忘れることなく、残りの学生生活はもちろん、今後の教師生活にも活かしていきたいです。

介護体験記

3 C 山本 愛理

私は介護等体験を通して、改め

て「人との関わり方」について考えさせられた。今回は障害者支援施設で五日間お世話になり、重度の知的障害を持つ方々に関わらせて頂いたが、体験初日はコミュニケーションを図れず戸惑いを隠しきれなかった事を覚えている。実際に現場へと足を運んでみると、私の想像をはるかに超える光景が目の前に広がり、太刀打ち出来ず、完膚なきまでに叩きのめされる思いがした。こちらの言葉を理解しコミュニケーションを取れる利用者の方に接する機会もあったのだが、やはり会話もままならず、相手が私に何を訴えているのか理解に苦しむ場面が多く、目の前の光景に立ちすくむことしか出来ずにただただ呆気にとられるばかりであった。しかし、不安を抱えつつも、このままではいけないと反省し、まずは利用者の方々の個性を理解して、一人一人に時間をかけて私に「何が出来るのか」を真剣に考えながら細部に注意を払うことにした。利用者の方々の行動に目を向け、周囲の音に気を配りながら、好きなことは何か、不快に感じる時は如何なる時なのかに着目して過ごすよう心掛けた。すると、

初日には見えなかったあらゆる側面が見えてくるようになったのだ。言葉を発することが出来ずとも、体を使って何かを表現しており、音に託して心情を訴えていることに気が付くことが出来たのである。私はこの実習を通して、たとえ言葉が通じなくとも、こちらから相手に関心を示し、「分かるう」とする姿勢さえあれば、目の前の相手を理解することが出来ることを実感した。これは、人々との関わりにおける最も根本的で最も重要なことなのではないだろうか。何を考えているのか、何を思っているのか分からない、理解出来ない当初から断念するのではなく、まずは相手に寄り添う姿勢が何よりも大切だということに今回改めて気が付くことが出来たと感じている。

留学生より

3 C 姚 菲琳

★出身地はどこですか？

中国の上海です。上海は、グローバル化が進んでいて、街に外国人が多いし、高層ビルもたくさんあ

るので、あまり中国という感じがしないかもしれません。

★日本に来たきつかけは？

テレビでおばあちゃんと「古畑任三郎」を見たときに、とても印象的で、日本語が好きになり、勉強をはじめました。発音がかわいいなという印象を受けました。

それで、ある国の言葉を勉強するのなら、その国へ行くのが一番手っ取り早い、と思い日本へ来ました。

★実際に来てみていかがでしたか？

東京のグローバルな雰囲気は、上海に似ているし、じめじめした空気も上海に似ているなどおもしろかったです。

また、こんなことを言っただけで怒られてしまうかもしれませんが、一番感じたことは、日本人は回りくどい面があるということです。いろいろ配慮しすぎて、なかなか前に進めなくなってしまうことがあると思います。私の性格が短気だということもあるでしょうが…。

★特に興味を持っていることはありますか？

私は伝統的なものが好きなので、古い建物や染物がきれいだと思います。なので、京都に行つて

みたいです。着物も、柄が手書きだと一点しかないものなので、とても素敵だと思います。

★日本で勉強したいことは何ですか？

日本語はもちろんですが、今は日本文学、とくに『古事記』の勉強をしたいと考えています。私の直感ですが、日本の根の部分は、『古事記』にあるのではないかと思つたので。今はまだあやふやですが、それを時間をかけて、ものにしたいと思っています。

★日本で学んだことを将来どう生かしたいと考えていますか？

日本の文化、特に日本文学を中国に広めたいと考えています。今では、メディアなどで交流がありますが、映画やドラマに比べると、文学というものは伝えにくいものだと思います。ですが、私は文学は芸術の一種、文字の芸術だと考えているので、きっと世界的に広げていけるものだと思います。

研究レポート

受容に秀でた

翻訳文化大國日本

2D 天木 優士

いつのことであつたか日本とタイとの会議で、英語での討論を日本語とタイ語にしようと提案があつた。日本側には何の異存もなかったが、タイ側がそれを拒否した。経済、特に金融の専門的な用語がタイ語では不正確になつてしまふのが原因であつた。翻訳語を作らなかつた東南アジアとの差を感じるエピソードだ。

欧米から取り入れた概念や専門用語などは英語のまま使われるのが多くの国の現状だ。一方、日本は数少ない例外である。日本は明治時代以降、欧米の文化を移入する過程で翻訳を多用し、新たな日本語を作つていった。かつて中国の文明を、漢字を媒介に受け入れた際にも、中国語そのものは受け入れなかつた。日本文化とは相反する巨大な欧米文化と対峙した際

にも、自らとの間に翻訳語という第三言語を挟み込むことで、これを日本化していった。現に「社会」「近代」「理性」などの言葉もこうして生み出されたものの一部である。

これだけの翻訳文化を築いた国は日本のみであろう。建国以来、終ぞ異民族に征服されず、異文化を日本化し続けた。異文化の需要という意味で、翻訳は大きな役割を果たした。しかし他方で、異文化との直接的接触が希薄になり、外のものの異質さに気付かなくなつた日本人がいる。これは自らのユニークさを見失う事にもつながる。言葉の三重化が出来てしまったこともまた事実だ。つまり、先に挙げたような日本語、英語、翻訳語の三重構造である。

日本の英語教育は中学校から始められ、長い者は大学までの約十年間に及ぶ時間を費やす。一方欧米では語学は二、三年である程度習得するものだ。もちろん個人の努力やセンスにも左右されるだろうが、それにしても日本人が外国

語をここまで苦手とするのはなぜである。私は、先に述べた三重構造が日本の英語教育に大きな影響を与えていると考える。日本の英語教育はいかに英語を日本語に置き換えるかが基本となる。つまり、英語を日本語に置き換えて理解するのだが、これが英語学習を困難にしている。なぜなら多くの生徒が英語と日本語との間に1対1の対応があるという誤解を抱くからだ。

我々は、redは赤、blueは青とは想起するが、redがアメリカ人にとつての血の色、情熱の色であることを、Dingoに陰気で憂鬱、または猥褻なイメージがあることを知らない。色という単純な概念でさえ、背景にある文明や文化によりこのような相違が発生するのだから、異質な文化に対しては、翻訳語的1対1対応などとてもできないのは当然であろう。日本化された概念ではなく、自らとは異なる概念に直接触れることでイメージを共有することが必要なのだ。そういう意味で留学は、非常に優れた語学習得の手段である。今や様々なもの、とくに情報において世界が極めて小さくな

り、どんなローカルなものでも望めば世界中に発信できる時代だ。ここで必要になるのは、相手が理解できる形で物事を発信する能力である。肥満が深刻な問題として台頭している欧米などでは、ヘルシーな日本料理に対する関心が急速に高まってはいるが、かつての岡倉天心の『茶の本』のように、英語で日本文化を語る動きは近年目立ってない。日本は、受信能力は極めて高いのに対し、発信能力が貧しい。日本のものを現地化して発信することができない。

確かに、アジアの中では日本は有数の先進国であるから、ある場面では日本流でリーダーシップを発揮できるのかもしれない。しかしながら日本流がそのまま通用することは多くはない。その国の歴史、宗教、文化などに合わせて現地化することも必要なのだ。

外来のものを日本化するプロセスを今一度見直さないとには、自国の実像さえ見失うことになりかねない。無論我々が理解しないことには、外から日本を見る人たちが日本を理解することもない。翻訳文化が悪いというわけではない。しかし、翻訳しているという

事実を忘れないことが、極めて重要なのだ。

韓国の「恨（ハン）」とアリラン

3D 敵^{オム} ボラ

韓国人を最も代表する情緒は「情（ジョン）」と「恨（ハン）」ではないかと私は思う。その中でも「恨（ハン）」はさまざまに韓国の文学を展開させる重要な感情である。「恨（ハン）」は悲しみ、後悔、自責、悔しさ、愛憎、執着、呪いなどの複雑な感情の固まりである。日本でも同じ漢字を使う「恨み」という言葉があるが、「恨（ハン）」と「恨み」は少しずれている。私は「恨（ハン）」と「恨み」の相違点は大きく二つがあると思う。

まずその感情が誰によるものであるかを考える必要がある。「恨（ハン）」の特性について次のようにまとめられている。

「恨（ハン）」は自ら起こす場合と他人から与えられる場合がある。前者は自ら後悔する行為をした場合で「自傷」になる。後者は他人や社会制

度、環境によって自分の欲求や意志が挫折され、それが人生の破局をもたらす場合、他人によって一方的な破滅を強要される場合で「打傷」になる。

〔韓民族文化大百科事典〕韓国学中央研究院、一九九二

このように韓国の「恨（ハン）」は自分（内）によるものと他人や社会（外）によるものとに分かれる。そして、いずれもその感情を外に発信せず、じっと自分の中にためて置く。そのため「ハンを抱く」「抱える」「ハンが結ばれる」のような言い方をする。

「恨（ハン）」と「恨み」はその感情を外に出さず自分の中に蓄積し、それに執着するという点では共通点を持つ。しかし、「恨み」は自分が原因の感情ではなく、おもに相手に向かっていることに「恨（ハン）」との違いがあると思う。内から発生する「恨（ハン）」はそれを解消するための対象が必要であるが、それに対して外から発生する「恨（ハン）」はそれを解消するためには特定の対象が必要となる。そのため他人による「恨（ハン）」は復讐を伴うときもある。

韓国のことわざで「女がハンを抱くと、五六月にも霜が降る」ということわざがある。これは女性のハンの恐ろしさをあらわしたことわざであるが、昔の人は女性がハンを抱くと自然環境まで変えることができると思ったのである。

ここから「恨(ハン)」と「恨み」の二つ目の違いを考えることができる。つまり「恨(ハン)」はそれを抱くことで自分以外の人や環境に間接的(呪術的)な影響力を持つことができるということである。

韓国で最も有名な民謡であるアリランからもこのような「恨(ハン)」の特性が見られる。アリランは韓国の代表的な民謡で、その種類も地域別に多様である。代表的なものがジョンソン(旌善)アリラン、ガンウォンド(江原道)アリラン、ミルヤン(密陽)アリラン、ジンド(珍島)アリラン、ギョングド(京畿道)アリランなどで、数百以上の種類がある。一般的に韓国人にはよく歌われている民謡である。普通アリランの前にその歌が作られた地域の名称や歌の意味が来る。地域によって様々なアリランが伝わっているが、独唱

の部分と繰り返し部分の部分を交替に歌うようになっている。繰り返し部分は「アリラン」「アリアリ」「アリ」など地域や歌によって少しずつ違いがある。アリランの起源と語源ははっきりしていない。特に「アリラン」という言葉が何を意味しているのかはいまだに分からない。その中で最も有名なアリランの一句を紹介したい。

아리랑 아리랑 아라리요

(アリラン アリラン アラリよ)

(アリラン 坂峠を超えていく)

나를 버리고 가시는님은

(私を捨てて 去っていく君は)

십리도 못가서 발병

(十里も 行かずに 足が痛む)

(足病になる)

발병 (バル ビョン) について

はさまざまな説があり、その意味がまだ明らかでないが、一般的には「足病になる」という意味で知られている。「私を 捨てて 去っていく君は 十里も 行かずに 足が痛む」という歌詞から分かるようにこの歌は男女の離別を歌った民謡である。ここで발병 (バル

ビョン) はただ足が痛むという意味ではなく、足(발)と病(병)を合わせた名詞でアリラン以外には韓国でも一般的に使われない言葉である。발병 ㅅ다(バル ビョン ナンダ)を直訳すると발병(バル ビョン・足病)が生じるという意味で、ただ遠い道を行くため足が痛くなるという意味ではなく、「私を捨てて行くと、あなたはきつと病気になるよ」というある種の呪いの気持ちが含まれているのである。

その理由で、韓国人の感覚では足が痛むという意味の발이 아프다(バル イ アプダ)と발병 ㅅ다(バル ビョン ナンダ)は意味的にはほぼ同じであるが、まったく感じが違う。相手を恨むことにとどまらず、さらに相手の不幸を望んでいる気持ち加わっているのである。まさに발병(バル ビョン)にはこのような「恨(ハン)」の情緒が込められているのである。

このように「恨(ハン)」は一般的に日本の「恨み」と同じ意味の言葉として知られているが、「恨み」だけではすっきりと表現できない韓国人の特有の感情ではない

かと私は思う。

【参考文献】

『韓民族文化大百科事典』韓国学中央研究院、一九九一年

<http://terms.naver.com/entry.nhn?docId=532214&cid=4655&categoryId=4655>

李愛淑「恨(ハン)と執の女の物語―比較文学研究の視点から―」

『アナホリッシュ国文学』第4号、二〇一三年九月



研究室探訪

矢嶋先生編

今回は、昨年の会報に引き続き、先生方の研究室にお邪魔してみました。



★こんにちは。早速ですが、先生は研究室に週にどのくらいいらっっしゃいますか？

授業や会議がない限り大学には来ないので、週に2、5日というところですね。理由は、自分の仕事ができるような本は、すべて自宅に集中しているので…研究室に来

てしまうと研究ができないんです。

★研究室や自宅には大体どのくらいの本があるのでしょうか？

冊数でいうと、この研究室と自宅を合わせて4万5千から5万冊だと思っています。

自宅には、本棚の前にダンボールで作った、臨時の本棚が天井まで達していて、それでは足りずに手前にもう一層ダンボールの本棚が数段置かれています。探している本が本当はどこにあるのかわかっていても、取り出すのに二週間ほどかかる状況ですね。



★その中で思い入れのある本や入手するのが難しかった本はありますか？

思い入れがあるというと、やはりメインの研究テーマである、上代文学のなかでも『古事記』でしょうか。

★どんなことを中心に研究されているのでしょうか。また、最近力を入れている研究テーマはなんですか。

メインとしているのは、古代の文学ですが、古代の文学はそんなにたくさん作品がないので、『古事記』『万葉集』『日本書紀』『風土記』などですかね。中心的なのは『古事記』です。よく出来ている作品で、何度読んでも、その構想を読みきれた気がしないところがおもしろいです。

また、最近では、『三国遺事』などに引用されている郷歌を勉強中です。これは、新羅時代の歌謡を記述したと言われている文献です。韓国は、固有語の文化よりも中国の漢字の文化を長い間優先していた国家でした。だから、固有語で書かれた昔の文献があまり残っていないんです。しかし、この文献には、めずらしく固有語で

書かれた歌が十四首載っています。その歌をぜひ読んでみたいと思つて、韓国語の勉強をはじめました。もう十年以上は過ぎたと思います。で、ようやく読める直前くらいまでできているかなという感じですね。よその国で、自国の言葉を使つてどういふ風に記述できたのかは、とても関心があることです。『古事記』や『万葉集』が漢字を使つて書かれたのと、パラレルな関係にもあるので、漢字文化の受け入れ方が日本と予想以上に異なっているところがおもしろいと思います。最大の関心事は、同じく中国から漢字を受け入れているにもかかわらず、『万葉集』や『古事記』と漢字の使い方が違うことです。自分なりにある程度、解決の道筋はつけているつもりです。まだ活字化はすこししかしていませんが。

★この研究室の便利などところやレイアウトのこだわりなどはありますか？

うーん…。研究室に関しては特にないな。仕事部屋としては考えていないので。研究室に置ける本棚の数が限られているから、それに応じている感じです。本当は、

本棚を増やして、自宅の本をもう少し持つて来たいのだけれど、これ以上は置けないと言われてしまいました。

ここでは、卒論の前段階として、学生同士が議論できるような場として考えているのだけれど：最近では就職活動などが忙しくて、なかなか利用してもらえないのが、今の状態ですかね。

ちなみに、自宅では手を伸ばせば本が取れるようにレイアウトしていたけれど、今はもう本がありません、無理ですね。

★学校以外でもいいのですが、好きな場所がありますか。

どこでも。世の中に行かなくていいものは、すべて遊べるつもりでいるので：。どこでも遊べるから、これと言って、おすすめ場所はないかな。気に入った場所などが無いわけではないけれど、それだけにずっとこだわるといこうとは、ないですね。

★何か宝物がありますか。

いくつかありますが、まずはガチャガチャですかね。ダンボールに二十箱くらいあります。子供が買ってお母さんに見せたら、その場で怒られるような類のものを集

めています。

もう一つは、『説日語』という、中国の日本語会話の学習のための本です。けれど、日本語がめちゃくちゃで：。渋谷から山手線に乗ってこの本を初めて開いたとき、立っていられないくらい笑えてね。原宿で初めて降りてしまいました。言語って、ほんの一部が約束事からずれるだけで、言語としての役割を果たさなくなってしまうすごい道具だと思います。



あとは、ゼミの学生たちと天保山に上った時の登頂記念の写真と証明書です。天保山は、日本一低い山で、4、25メートルだったかな。明日香村にベースキャンプをはって、低地なれをしてから登頂したっていう思い出です（笑）

そして、さきほどもお話しした韓国の古代歌謡です。この関連の本が増えたことで、蔵書が三分の一ほど余計に増えてしまいました。これも、僕にとつて大切な遊びのうちのひとつです。到底この大学を辞めるまでに結実する内容ではないのですが、遊び道具のひとつとして、韓国語を手に入れたことは、最大の収穫かもしれません。

今挙げたものは、僕にとつては、どれも大切な遊びで、序列がつけられないものなんです。すべて同じくらい大切な遊び道具です。

★最後に、学生に向けて何かメッセージをお願いします。

社会に出てしまうと、もう今ほど真剣に意味のないことに熱狂することができなくなってしまうので、自分で研究する価値があると思うものを、もし見つけたならば、4年間熱狂的にやってみたら、きっと楽しい4年間が過ごせる、という風に思います。たぶん、熱狂できるのは、学生時代だけなのではないかなと思います。本当にお金を稼いで食べて行こうと思ったら、自分の意志など曲げなくてはいけないことも出てくるでしょうから。それに、エネルギーがな

いと、余暇があっても熱狂できないでしょ。今の貴重な時間を大切にしたいと思っています。

澤田先生編



★早速ですが、先生は研究室に1週間のうちにどのくらいいらっしゃるのですか？

だいたい3〜4日あたりでしょうか。ぶらっと研究室に来られる方がいいのですが、自宅がやや離れているので、授業や会議、研究会などが無い日は、だいたい自宅で仕事をしています。

★この研究室には大体何冊くらいの本があるのでしょうか？

数えたことはないけれど、600〜700冊といったところでしょうか。

★この中で思い入れのある本はありますか？

いちばん思い入れがある本は、洋書になるのですが、チャールズ・フィ尔蒙ア氏の『Lectures on Deixis (ダイクシス講義)』という本です。ダイクシス(直示)とは、指示詞、敬語などのように、発話の場面に依存して意味の解釈が決まることばの性質のことを言います。フィ尔蒙ア氏は、言語学において、認知言語学や語用論の分野を開拓した研究者の一人です。

和書だと久野暉氏の『談話の文法』が挙げられます。談話やテクストの中で文法の振る舞いを考察している本です。この本では、「視点」についても取り上げられています。「視点」は語学と文学をつなぐ興味深いテーマの一つです。

★先生はどんなことを中心に研究しているのですか？

主に研究している領域は、文法と語用論です。語用論というのは、発話の場面や文脈との関係の中で、ことばの働きや意味について研究する分野のことです。日本

語は、語用論の研究にとって大変魅力的な言語だと言えます。日本語は、語用論的な現象の宝庫です。たとえば敬語を例にとると、会社のパーティーで司会者が、「社長

からひと言ご挨拶を頂きます」と言うか、「社長からひと言ご挨拶を申し上げます」と言うかではだいぶ違ってくるよ。後者の例では、そのパーティー会場に取引先などの社外の人々が招かれていて、司会者はその社外の人を意識した司会をおこなっていることがわかる。いわゆるウチソトの問題ですが、敬語の選択には、場面への考慮が不可欠となることから、先ほど触れたダイクシスの問題とも深く関わるんですね。こういった語用論の観点に着目しながら、日本語以外の言語や日本語の歴史・方言についても調べています。

★この研究室の便利などころやレイアウトのこだわりなどはありますか。

日文研がすぐそばにあるのはいいですね。授業開始までの一分一秒を争う時でもさっとコピーをしに行ける(笑)。

レイアウトのこだわりは特にありませんが、しいて挙げるなら洋



書を何となく表紙の色別に置いていることかな。洋書の場合、タイトルを忘れやすいのですが、本の色のイメージをもとに探すとすぐに見つけることが多いですね。

本の置き方や収納には、どの先生も苦労されているのではないのでしょうか。特に文系の研究の場合、家が本で埋もれてしまう。本を探し始めたはいいけど見つからず、同じ本をもう一冊注文したといったような話はよく聞きます(笑)。

★学校以外でもいいのですが、好きな場所ありますか。

しいて言えばテニスコートかな。週末に時間ができたときなどは、日ごろの運動不足の解消もかねてテニスをしています。テニス、正確にはソフトテニスですが、小

学生のときから始めて今でも飽きずに続けているので、競技歴は長いですね。高校時にはインターハイにも出場しました。こればかりは妻にことあるごとに自慢しています(笑)。

★何か宝物はありますか。

思い出の品というものであれば、ここにある第一期の卒論ゼミの学生達からもらった寄せ書きかな。僕が青学に赴任して来たのは2012年ですが、そのとき卒論指導した学生達からもりました。

★最後に、学生に向けて何かメッセージをお願いします。

4年間のうちに、「これだ」と心の底から思える本に出会えるといいですね。そして、「読書」を「研究」へとつなげてほしい。「研究」というと何か高尚なことのように聞こえますが、読書を進める中で、自分の頭でも考えてみたり、自分に気になったことを調べてみることはその人にとっての「研究」なんです。 「研究」にはその人の感性や個性が現れます。日本文学や日本語学での学びを通じて、「研究力」を培ってほしいと思います。

留学体験記

4 C 福岡 宏紀

アメリカへの留学。それは始め、僕にとって大きなチャレンジであり決断のいることでした。日本文学の学生でありながら海外留学を志した理由は、僕が日本とは異なる環境を体験したかったという単純な興味から来るもので、留学が決定した後も留学のための準備に追われ、確かな実感がもてないまま、僕はアメリカのオレゴン大学へと出発しました。

幸いオリエンテーションなど留学生のためのサポートは手厚く、同じ日本人や他国の留学生と友達になることができて、授業登録や寮への入居手続きなど忙しくなりながらも、皆の力を借りてやっていくことができました。

日常会話は他の留学生や交流イベントに参加し会話を重ねることで、次第に上達していきました。しかし一方で、留学先の授業では普通の会話と違って、言語的なハンディキャップを感じて苦労しました。日常会話と違い、授業内で

先生の使う言葉の中には専門的な単語もありますし、難しい内容も話されます。初めはほとんど先生の言ったことが聞き取れないまま、なんとか内容を理解しようと苦心していました。

当然ですが、アメリカでは多様な人がいて、オレゴン大学は毎年大勢の留学生を受け入れています。現地の人と同じ授業を受ければ、僕が留学生として、特別扱いを受けるようなこともありません。平等であるが故に評価されるのは個人の實力に依る所が大きく、多くの授業では学生が積極的意見を出して、他よりも多くの学びを得ようとしていました。そんな周囲に負けないように僕も懸命に勉強しました。

ところで、自由の国といわれるように、アメリカに住む人は基本的に迷惑でなければ他人のやることにとやかくいいません。学校でも、オリエンテーションが終わってしまえば、参加必須のイベント

もなく生活は自由で、全てが僕の選択に委ねられていました。目の前の課題をこなして予習をすれば、授業は楽になるし成績も上がる、遊びにいつて予習を放棄すれば、次の授業では苦労するけれど新たな体験をすることができると。自分の選択が将来に直結していることが僕にはとても新鮮でした。

しかし、考えてみれば日本においてもそれは同じだとも考えさせられました。留学先のように、常に期日にせまられるような事はないうにせよ、将来の目的のために日々の行いは蓄積されて将来につながっていたはずでした。今でも色々な面で周囲に支えられている僕ですが、自分の生活を自分で決めてコントロールすることから意識するようになったと思います。

慌ただしかった一学期が終わり、冬休みに僕は知り合いとニューヨークへ行くことにしました。西海岸から東海岸への長旅でしたが決意した後はスムーズでした。僕がニューヨークに行きたかった理由のひとつはオペラの鑑賞です。日本の映画館で観た、メトロポリタン劇場で行われる公演を生で見

ることができました。それは留学に行く前の自分では考えられないような体験でした。

オペラ公演の翌朝、朝食を食べながら僕はここでやっていけそうな気がしました。思い返せば、留学前、実感がもてないまま、僕はとても遠い場所に行ってしまう気がして落ち着かず不安に駆られていました。自分の進む道が非常に困難なもののようにも思えました。しかし、映画の舞台を生で見ることができたように、僕は始める前から心の中で高い障害を作っていただけで、それは手順を踏めばずんなりと達成できるものでした。

全て書ききることができませんが、その後も様々なことを体験できた価値ある一年間でした。日本に帰国して目についたのは外国人の多さです。僕はそこで、もはや日本だから、海外だからと境界を引くことはないと感じました。広い視野で自分を見つめられるようになったこと、これが留学で手に入った一番の財産ではないかと思えます。留学に関わり支えて下さった全ての人に感謝します。ありがとうございました。

直に触れて感じた歌舞伎

— 私と子どもたちの可能性 —

二〇一五年五月十三日。宮城県石巻市の中学生の修学旅行の一環として歌舞伎の体験授業が青山キャンパスで開かれました。青山学院文学部比較芸術学科と日本文学科の先生方、そして比較芸術学科の四年生であり、歌舞伎役者の中村児太郎さんのご協力のもと、とても有意義なものになったそうです。

この企画をしたのは日本文学科の四年生、西部葉月さんです。この取り組みには、東北の子どもたちを支援するボランティアイベントという趣旨も含まれており、西部さんは東日本大震災被災地支援プロジェクトチームEn（えん）に参加し、他にも様々な活動を行ってきたそうです。



今回、その西部さんにお話を伺うことができました。

★まず、被災地支援プロジェクトチームEnとはどのような団体なのですか？

Enは二〇一一年に東日本大震災が起きた直後に、受験を控えた

子どもたちが津波によって物理的・精神的に学ぶ環境が損なわれながらも、瓦礫の中の道を歩いて学校に通う姿を見て、何か手助けができないかという思いから学習支援を始めました。そして大きな特徴として、多様性にとんだ社会人と学生が一つのチームになり、目的として、私たち参加者の成長の場とするのも掲げています。再び震災が起きた時、また様々な場面・分野で、一人一人がリーダーシップを発揮できるように、互いに学び合っています。

私はその活動に大学二年生とから参加しています。高校生の頃から学校の先生になるのが夢で、教育に関わるボランティアで学びたかったことと、かねてから被災地の現実を知りたいと思っていたことが大きな理由です。

最初は高校生を中心に泊まり込みの学習支援を行っていましたが、去年からは主に中学生の学習支援を始め、毎月一、二回、現地に赴きサポートしています。勉強に来た子どもたち自身の努力が実ったことがいちばんの要因ですが、なんと全員が志望する高校に合格しました。卒業式に参列させ

ていただいた際、「震災を言い訳にしてほしくない」「優しさは強さの裏返しです」と言う校長先生からのお言葉や誇らしげな卒業生たちの姿から、私たち自身が勇気もらいました。そしてそんな校長先生からの「学びを修める旅にして欲しい」という熱い思いから、今回の修学旅行のイベントを私たちEnで企画させて頂くことになったのです。

★では、その修学旅行のイベントの計画はどのように立てていったのですか？

全体で二泊三日の修学旅行だったので、私たちがEnが計画を担当させていただいたのは、その中の一日です。

まず、修学旅行をする場所が東京でしたので、東京にしかない場所や人を通して、東京でしかできない学びや経験を中学生たちにしてもらおう、という考えを軸に計画を立てていきました。ロボット工学、伝統工芸、教育など幅広い学習テーマを用意し、その中から中学生たちに自分の興味のある分野の学習を選んで、班ごとに分か

れてもらい、私たちが案内しました。例えば、JAXA、学生企業家のもとへ案内した班もありました。

私が企画したのはその中でも、歌舞伎の魅力を知ってもらおうというものでした。私がこの企画を思いつくにあたってポイントとなったのは、人とのつながりです。今回、中学生に歌舞伎の魅力を伝えることに大きく力を貸してくださいましたのは、青山学院の学生であり、歌舞伎役者でもある中村兎太郎さんです。中村さんと私との接点はたまたま共通の知人がいたことです。それをきっかけに、どんな人づてに計画の輪郭はできていきました。中村さんの所属している比較芸術学科の佐久間康夫教授、佐藤かつら准教授、私が日本文学科でお世話になっている片山宏行教授、そして、歌舞伎に興味のある両学科の学生。多くの方々のご協力のもとこの企画は生まれ、実行にいたったのです。

★なるほど。それで、中学生の反応はどうでしたか？

そうですね。五人の男子中学生

が参加したのですが、この学習テーマを最初から希望してくれていた生徒は、実は一人でした。その他の四人は抽選で漏れてしまっただけで、この班に回ってきたようであつた。その話を事前に聞いていました。ですから、どのようにしたら子どもたちに歌舞伎の魅力を伝えられるのか悩みました。東京にいる私たちでさえ、歌舞伎についてそこまで多くを知らないのに、ましてや東北の子どもたちなら、歌舞伎に馴染みはほとんどありません。それに加えて、希望者は一人だけ。難しかったですね。そこで中村さんと相談して、時間のほとんどを体験学習にしようということになりました。座学だけでは飽きる。魅力、知識などの学びはまず、楽しいと思ってもらうところから。歌舞伎は楽しい、また見たいと思ってもらおうというのをいかなる目的としました。

当日は中学生五人に対し、中村さん含め五人の役者の方が来てくださいました。贅沢ですよ。体験では中学生は浴衣を着て、歌舞伎の化粧をしてもらいました。立役（男の役）と女形、それぞれの化粧をしてもらったのですが、み

んな本当にきれいな顔になって。中学生たちも自分が思った以上に化粧が似合うので驚いていたようです。中村さんも教えるのがとても上手な方で、ここから歌舞伎役者を出してもいいくらいだね、なんて声をかけていました。最初はなんとなくおっかなびっくりだった中学生の心も、これで一気につかむことができました。あとは役者さんがするように歌舞伎のポーズをとったりして。みんな楽しんでくれていたので本当に良かったです。実際に後で感想を集めてみたら、歌舞伎の世界に入りたいと書いてくれた生徒もいるんですよ。予想以上の収穫でした。本来、中学生の学びの場ではありましたが、私たち大学生にとっても良い機会でした。中村さん自身、歌舞伎を若い世代にもつと



知ってほしいという思いを強く持っていて、私も多くのことを学びました。中学生の学習支援をするというだけではなく、大学生とともに学び合う良いイベントになったと思います。

★それは素晴らしいですね。計画を実行してみて、実感したことは何かありますか？

やはり今回は体験学習がメインでしたので、見て聞くだけではなく、実際に触れることで感じ方が全然違うのだなということを実感しました。本当にここから歌舞伎役者が生まれることは稀かもしれませんが、自分が体験したことは、何年か経った後、きつと彼らの中で芽吹くものがあると思いません。教育には一つのゴールは無いし、その結果は数値化できるものはありません。長い視点で見てもいいかなってならないものです。E.N.で活動している中でも実感するのですが、子どもは手をかければかけただけ、受け取ってくれます。そしてそれを自分の力に変えられるのが子どもの可能性です。そのようなことを考えても、中村兎太

郎さんをはじめとする、今回、企画に協力してくださったみなさんには本当に感謝しています。

★ご自身のこの体験を通して伝えたいことはありますか？

まずはボランティアについてですね。みなさんは被災地の復興が、現在どのくらい進んでいると思いますか？ある程度、立ち直ってきていると思う人がほとんどだと思います。しかし、現状はそうではありません。まだまだ支援は足りていません。それにも関わらず、時間の経過とともに人々の被災地への関心は薄れ、活動期間の終了などもあり、現地ボランティアは減りつつあります。その中でも今、支援が最も必要なのは被災地の人々の心だと思えます。住宅街は草原と化し、人々の周りには見渡せば震災のことを思い出させる景色が広がっています。今回の体験学習の中でもお化粧を落とすとき、水が怖いと言った生徒がいきました。普段は明るい子どもたちも背負っているものがあるのだと思います。目に見える復興は進んでも心は置いてきぼりのままなの



です。

ボランティアは若い人ほど、ぜひ、入ってもらいたいです。最初から何かしたい、助けたいという使命感は無くても、まずは自分が何かを学びたいという思いから行動に移してみるといいと思います。

次には、歌舞伎に興味を持ってほしいということですね。歌舞伎は素敵な日本の文化です。見に行く価値は大いにあります。せっかく東京の大学に通っていることですね、今観ないともつたいないと思えます。伝統芸能は見る人があつてこそだと、私は思います。演じている役者がその伝統を守るだけではなく、観て、楽しんで、感想を生み出す観衆も大切な存在です。もしかししたら歌舞伎というと、なんとなく敷居を高く感じてしまう

人もいるかもしれませんが、歌舞伎は時代の流れとともに変化し続けている生きた伝統です。日本文化のいろいろな要素が歌舞伎という文化には結晶化されているので

土地の文化、自然環境を守るのにはそこに住む人々です。そのためにはまずは知るところから。住んでいる土地の文化を知ることが、その土地で生きる自分自身を知ることにもつながると思います。自分とはなんなのか、日本人とはなんなのか、それが分かっている人は人間の芯も強くなると思います。失くしてはいけないうものが文化の中にはたくさんあると感じています。

★最後に。学生に一言お願いします。

何かをしようとするとき、大事なのは踏み出す力だと思えます。自分が知りたいことを知る、見たいものを見る。百聞は一見に如かず。行動あるのみ。自分次第です。ときには思い切った行動をとるのもいいと思います。自分のキャパシティを超えたところに飛び込

んで、やり遂げたときには自信にもなります。機会があふれていきます。まずはその機会を探すところから始めてみるのもいいと思います。今の学生という身分を大いに活用して、自分にたくさん投資をしてみてもいいでしょう。

★なるほど。ぜひ参考にさせていただきます。貴重なお話ありがとうございました。



修士論文中間発表報告

去る二〇一五年七月十五日、梅雨も終わりに近づき猛暑の相を示す青山キャンパス17304教室にて「二〇一五年度修士論文中間発表会」が行われ、七名の大学院生が発表した。十二時四十五分に開始された会は、二度の休憩をはさみ、約四時間にも渡った。以下、発表の様子・要旨を簡略に記してゆく。

※題目は発表会時点のもの。

▽小田島由佳（近世） 『拾遺御伽婢子』論

『拾遺御伽婢子』の分析によって、作者・柳絲堂の人物像と創作意図を研究している小田島氏は、武辺話に一話だけ「怪異性の存在しない話」があることに着目した。ここに創作意図があり、よって作者は徳川家康の身代わりに討死にした夏目吉信の子孫、「夏目吉頭」ではないかという説を提示した。

▽藤嶋ゆかり（近世） 『江戸中期の随筆『耳囊』について』

随筆集『耳囊』を整理し、適切な評価を与えること、を目的として研究している藤嶋氏は、作者・根岸鎮衛についての発表を行った。根岸が長らく「遠山の金さん」と同一であると誤解されてきた事実に加え、同時代から現代までの人物評、作中の作者自身の心情描写等から考えられる人物像を紹介した。

▽金城 ゆり（中古） 『古今和歌集』四季歌 — 素材とその表現 —

『古今和歌集』の様相について研究している金城氏は、『萬葉集』以来詠まれてきた素材の変化と、

その表現のされ方を「四季歌」の中で探った。氏は『古今集』が『萬葉集』の内面・素材を単に継承、取捨選択したものではなく、漢詩文の影響を受けて巧みに「再構築」されたものではないかとした。

▽鈴木 祐佳（中古） 『源氏物語』における六条院の四方四季と人物呼称について

『源氏物語』における六条院の四方四季と人物呼称について、『源氏物語』における、六条院の役割について研究している鈴木氏は、先行研究が「四方四季の館信仰」や「戌亥信仰」という構造的観念に囚われているのではないかとし、六条院の四町に据えられた女君たちの「呼称」という側面から考えれば、より端的に捉えられるのではないかと述べた。

▽濱中 菜摘（中古） 『髭黒北の方』の人物造型とその意義

『源氏物語』の登場人物の一人「髭黒北の方」について研究している濱中氏は、彼女の人物造型の捉え直しと「紫の上」との関連性を論じた。氏は「紫の上」や、『紫式部集』中の物の怪と比較して「髭黒北の方」を考察し、両者の関連

は「心の鬼」を認識しているか否かの「対比」という仮説を示した。

▽安藤 優一（近代） 『日野啓三論』初期言説の投影と変容

作家・日野啓三について研究している安藤氏は、日野の作品の根底には、評論家時代からの「台風の眼」言説や「焼跡の真実」認識を経た、「こちら側―向こう側」という構図が存在しているということ述べ、これまであまり研究されてこなかった「日野啓三」という作家の位置づけを行いたいとした。

各発表後の質疑応答では活発な議論が展開され、時間を越えてしまいうこともあったが、それだけに発表者のみならず、我々聞き手にとっても非常に有意義な会であった。次年度もこのような会となるよう研究に邁進しなければ、と気持ちを新たにされた。（なお、藤嶋ゆかりさんは病をえて急逝された。御冥福をお祈りします。）
（大学院博士前期課程一年 市川直人、内村文紀、小川剛史）

▽佐藤 織衣（上代） 『戦時下から戦後占領期の国語教科書における『萬葉集』』

戦前から戦後の国語教育における『萬葉集』の扱われ方を主に研究している佐藤氏は、当時の教科書に採録されていた「萬葉歌」についてどのような解釈がなされていたかを言及した。「墨塗り教科書」等、戦後の「検閲」にも触れ、戦前から続けて採録されている歌の背景も考察していきたいと述べた。

日本文学特講A

(夏期集中講義)

能楽入門講座

3 A 関 美紗央

夏休み中に行われた観世流シテ方楽師の武田祥照先生をお迎えしての能楽入門講座では、初日にお能に関する基本的な知識習得のための座学、二三日目には先生のご自宅の能舞台をお借りしてのお稽古、そして最終日には先生がシテを舞ってくださる能舞台「安達原」の鑑賞という非常に濃密なプログラムで、実際に見て触れて体験し楽しみながらお能の世界に飛び込むことができました。

気さくで明るくかっこいい、現に能楽師として活躍中の祥照先生にご教授していただいたこと、座学にとどまらず舞やお謡いを実際に体験できたこと、通常ならば見ることのできない能楽堂の裏舞台や開演前の楽屋、貴重な能面、お装束を実際に見せていただいた

こと、授業最終日に私たちのためにお能を舞ってくださったことなど、どれをとっても本当に貴重な贅沢な体験をさせていただきました。こんなに楽しい授業は今まで受けたことがない、人生の財産になったと感じるそんな素敵な授業でした。

特に授業最終日に渋谷のセルリアンタワー能楽堂で先生が舞ってくださった「安達原」は見ていて思わず涙が出るほど感動しました。全国を行脚する修行中の山伏が、一人の老婆が住むあばら家に一晩宿を借りるのですが、実はその老婆が安達原に住むという有名な鬼女で、ひょんなことから自分の本性を知られた鬼が山伏を殺そうとするも、山伏の祈禱に負けた鬼は夜の闇に姿を消すというお話です。

祥照先生の演じる鬼が山伏にじりじりと追い詰められていく場面では山伏に裏切られた鬼の気持ち

を思うとなんだか切なくて見ていて息が詰まる思いでした。ただこれは私の感想にすぎません。鬼の気持ち表現しているセリフはなので観客は想像しながら舞台を観ます。鬼がもともと山伏たちを食べようとして家に泊めたのか、親切心から泊めたものの正体を知られてしまったから山伏を殺そうとしたのかはわかりません。ただ、このように「自由な解釈を観客に委ねている」、これこそがお能の舞台の一つの魅力なのだと思っておっしゃっていました。

能舞台は必要最低限のお道具や舞、ストーリーを支えるのに必要なセリフのみで進行します。大切な核となる部分だけで、余計なもの全部取り払われた舞台なので、多くの余白が存在し、それが演じ手にも観客にも自由な解釈を許すのです。そして観客はそこから何を感じ取るかも自由です。

古典芸能だから、と私たちはお能に対してどこか格式ばったお堅いイメージを思い描きがちですが、実はお能は昔からの伝統を継承しながらも意味とても自由で、誰にとっても常に新しいものなのだと思えていただきました。

祥照先生は「お能は私たちに生きるとして与えてくれる」とおっしゃっています。ぜひお能の舞台を一度見てその面白さや奥深さをもっと多くの人に体感してほしい！今回の授業でお能に魅せられた者として強くそう思います。



二〇一五年度講義題目

〈大学院〉

上代文学演習(一)

漢字文化圏から日本文学史を讀み直す 矢嶋 泉

上代文学研究(二)

古典文学研究と古筆研究 「継色紙」を讀む 小川 靖彦

中古文学研究(二)

『源氏物語』真木柱巻を讀む 土方 洋一

中古文学演習(二)

平安和歌研究の方法を探る 高田 祐彦

中世文学研究(二)

延慶本『平家物語』の輪讀と研究発表 佐伯 眞一

中世文学演習(二)

『長短抄』研究 廣木 一人

近世文学演習(二)

黄表紙研究 大屋 多詠子

近世文学研究(二)

『諸国百物語』を讀む 篠原 進

近代文学演習(二)

個々の研究テーマの発表 片山 宏行

近代文学研究(二)

横光利一研究 日置 俊次

近代文学研究(三)

アナキズム文学およびプロレタリア文学研究 アナキズム文学および戦後民主主義文学研究 竹内 栄美子

近代文学演習(三)

谷崎潤一郎研究 山口 政幸

韻文学研究

『中書王御詠』の注釈 中川 博夫

劇文学研究

人形浄瑠璃の正本を讀む 佐藤 かつら

日本語学研究(一)

最新文法の方法を学ぶ 近藤 泰弘

日本語学演習(二)

文法論と語用論の研究法 澤田 淳

日本語教育学演習

連語の研究 山下 喜代

中国古典学研究

李賀の詩を讀む 遠藤 星希

文学研究法

作品を讀むために 矢嶋 泉

文学研究の基本を学ぶ

高田 祐彦

文学研究の基礎を身につける

土方 洋一

日本文学研究のための基礎知識・能力の養成

廣木 一人

日本文学史

上代・中古文学史 矢嶋 泉

中世文学史

佐伯 眞一

江戸文学の透視図

篠原 進

明治・大正・昭和初頭の文学の概要を把握する

片山 宏行

古典文学概論

江戸文学を通して「古典」の理解を深める 大屋 多詠子

近代文学概論

短編小説の世界 日置 俊次

漢文学概論

中国古典文学における「小説」について 澤田 淳

日本語史

日本語文法の歴史を考察する 澤田 淳

表象文化研究概論

近代日本を文化社会学的に分析する 鈴木 貴宇

日本文学入門

「日本文学」を通じて、日本の言語・文学・文化を考察する 小川 靖彦

文学交流入門

日本文学を「文学交流」の視点から展望する 小川 靖彦

日本文化文学入門

日本文学を専門的に学ぶ外国人が必要とする基本的な日本語・日本文学・日本社会・文化・日本人の一般思想について 廣木 一人

日本文学演習

『萬葉集』の美とその翻訳 小川 靖彦

『古事記』の世界／『日本書紀』の世界

矢嶋 泉

『源氏物語』夕顔巻の精読

高田 祐彦

『紫式部日記』の精読

土方 洋一

『枕草子』を通して平安朝文学の特徴を理解する 津島 知明

『後拾遺和歌集』の読解

中川 博夫

長編小説の構造・力学を考える
— 『砂の器』と『IQ84』

山口 政幸

『新古今和歌集』研究

廣木 一人

昭和初期の短編小説の精読

村上 陽子

『平家物語』を読む

佐伯 眞一

翻訳演習

説話集を武士の登場場面に注目し
て読む

平藤 幸

日本文学や日本文化の英訳と日本
語言文との比較検証および再翻
訳

佐藤 智広

中国古典文学演習

『好色五人女』—「八百屋お七」
という都市伝説の謎

篠原 進

『懐風藻』の主要な作品を読む

李 満紅

中国文学・思想演習

『金々先生栄花夢』を読む

大屋 多詠子

齊梁時代(5〜6世紀)の「文学」
の実相について

金子 俊之

文学交流演習

『猿蓑(さるみの)』を読む

井上 泰至

異国の文化・文学がぶつかった時
に何が生じるのかを捉える

『雨月物語』を読む

片山 宏行

日本語学演習

芥川龍之介とその作品について

日置 俊次

日本語文法の諸問題

現代短歌の研究と実作

澤田 淳

日本語敬語の諸問題

戦争と文学の関係を中心に国内外
の社会状況の変化と文学作品と
の関係を探求する

石田 仁志

日本語の特徴を明らかにする

鳥崎藤村『春』を読む

奥田 芳和

日本語初級教材のシラバス分析と
模擬授業を通して、初級の学習
項目の把握と指導法の理解、基
本的な教授能力を習得する

夏目漱石『三四郎』を読む

近藤 泰弘

日本語学研究の方法論全般

日本語・日本語教育演習

日常使用している言語について、
地理的・社会的観点から考える
ための基礎的な力を養う

鍾水 兼貴

『源氏物語』橋姫巻を読む

土方 洋一

古典で読み解く中世の鎌倉

佐藤 智広

文学的近代、演劇的近代の意味を
考える

市川 浩昭

中国古典文学講読

『論語』を読む

樋口 泰裕

日本語学講読

敬語に関して幅広く学ぶ

奥田 芳和

書道の歴史と実技

大橋 修一

中国書道史と実技

書の基礎知識及び技術を身につけ
る

金子 馨

日本語教育概論

日本語教育に関して理解を深める

山下 喜代

日本語教授法

日本語初級教材のシラバス分析と
模擬授業を通して、初級の学習
項目の把握と指導法の理解、基
本的な教授能力を習得する

川端 芳子

『萬葉集』・書物学・文学交流の研
究方法

小川 靖彦

卒業論文作成指導

矢嶋 泉

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流の研
究方法

小川 靖彦

卒業論文作成指導

矢嶋 泉

平安時代の文学、またはそれに関
する対象扱う卒業論文の指導

土方 洋一

卒業論文作成指導

高田 裕彦

卒業論文作成指導

佐伯 眞一

中世・近世の韻文学

廣木 一人

主に近世文学

篠原 進

近世後期の文学

大屋 多詠子

近現代の物故した作家、およびそ
の作品

片山 宏行

卒業論文作成指導

日置 俊次

日本語学の卒業論文の書き方

近藤 泰弘

日本語学関連をテーマとした卒業
論文作成指導

澤田 淳

日本語教育や日本語に関する卒業
論文作成指導

山下 喜代

日本語教育演習A

「日本語会話クラス」の開設を想
定としたグループワーク

日本語についての研究法の学習と
調査レポートの作成

山下 喜代

日本語教育演習B

日本語教育で扱う文法項目のレポートの作成
中・上級の教材作成と模擬授業

川端 芳子

日本文学特講

『古事記』が和文で書かれた事情を考える
矢嶋 泉

源氏物語と和歌との関係を考える
高田 祐彦

一人称で書くこと―〈私〉の表象
土方 洋一

連歌についての理解
俳諧とは何かを考察する
廣木 一人

軍記物語とは何か
佐伯 眞一

ベストセラ―と広告
篠原 進

『桜姫全伝曙草紙』を読む
『椿説弓張月』を読む
大屋 多詠子

菊池寛「話の屑籠」の評釈を行い、
同時代の世相・文学について考
察する
片山 宏行

原爆や沖繩戦を主題とする作品を
取り上げ、戦後も現れる〈亡霊〉
的存在について考える
村上 陽子

横光利一研究―短編小説の世界―
日置 俊次

文学交流特講

日本の古典詩歌の翻訳と受容
古代人の自然観・宗教観
小川 靖彦

日本文学とアジア

近世文学を通して日本とアジアの
関係について考える
大屋 多詠子

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ
西欧における日本文学の受容
畑中 千晶

表象文化論
ファッションと映画で見る現代文
化
007シリーズから見た現代世界
助川 幸逸郎

古典の色彩美―写本料紙の色彩美
古典の色彩美―『萬葉集』の色
小川 靖彦

近代文学における〈都市〉〈東京〉
の表象
現代文学における〈家族〉の表象
石田 仁志

日本文学特講A (集中講義)
「能楽入門」
武田 祥照

中国文学・思想特講
『唐詩選』所収の詩を精読する
遠藤 星希

中国古典文学特講
『論語』を読む
樋口 泰裕

中国唐代までにおける女性詩人の
作品を読む
樋口 泰裕

日本語学特講
日本語研究の枠組みを超えるため
の方法論の提示
近藤 泰弘

日本語と外国語との比較対照研究
言語の変異について考える
澤田 淳

日本語教育特講
日本語の「文法」の指導内容と教
材化について
日本語の「語彙」の指導内容と教
材化について
山下 喜代

「短期集中日本語会話クラス」の
開講準備、授業実施、事後評
価活動
山下 喜代

日本語研究のための英語
日本文学を専攻する学生が、英語
で書かれた日本文学・文化論を
正確に理解し、自ら英語で発信
する能力を養成する
福田 武史

音声表現法
思っていることをわかりやすく、
的確に表現する方法について
坂本 充

文章表現法

文章技術の向上を目指す
木村 寛子

〈研究室だより〉

*二〇一五年度三月の卒業生は
一三九名、四月入学生は一三二
名でした。大学院前期課程三月
修了生は九名、四月入学者は三
名、後期課程の四月入学者は一
名でした。

*二〇一五年度から新たに非常勤
講師として、新井久容、新谷啓
子、石田仁志、内田あゆみ、大
橋修一、金子俊之、鈴木貴宇、
竹内栄美子、武田祥照、中川博
夫、村上陽子の諸先生方にご尽
力いただいています。

*二〇一五年度は、高田裕彦教授
が学科主任を務められました。

*二〇一五年度は佐藤泉教授が内
地留学（立教大学）のため休講
なさいました。

*二〇一五年度日本文学会大会
（春季）・講演会・総会が四月
二十五日に青山キャンパス、
十四号館大会議室で開催されま
した。講演会については本会報
四頁をご覧ください。

*二〇一五年度日本文学会大会
（秋季）・講演会が十一月二十二
日に青山キャンパス九号館
九二一教室、ゼミ紹介が十四号
館第十会議室・第十一会議室で

開催されました。講演会につい
ては本会報五頁をご覧ください。

*大庭ちづるさんが退任されたた
め、四月から後任として正木恵
理さんが副手に着任されまし
た。

（編集後記）

今年の会報では、昨年を引き続
き、研究室探訪という企画を実施
しました。実際に研究室に赴き、
レイアウトのこだわりなどをうか
がうことにより、先生によって研
究室の様子がいろいろ違って
いるのだということが分かり、とても
面白いと感じました。また、先生
方の最近の研究のお話や大切にさ
れているものなど、普段の授業で
は聞けないようなことも教えてく
ださり、興味深い記事となったの
ではないかと思えます。

また、今年は東北でポランティ
アをされている西部さんにもイン
タビューをおこないました。東北
の現状や、ポランティアを通じて
考えたことをお話しくださり、私
自身にとって、本当にいろいろな
ことを考えるきっかけとなりました。
西部さんがおっしゃっていた、
「踏み出す勇氣」という言葉が特

に心に残っております。この記事
が、皆様にとっても、何かを考え
るきっかけとなればと願っており
ます。

今年から、日本文学会大会が春
と秋の二回開催となりました。秋
季大会では、廣木先生の講演の後
に演習紹介をおこないました。演
習紹介は初めての試みだったた
め、至らない点も多くあったと思
いますが、今後に繋げていけたら
と思います。

来年度は、日本文学科創設五〇
周年となります。日本文学科に
とって、節目となる大切な年です
ので、学生委員会といたしまし
ても、歴史を振り返り、未来に繋げ
ていけるような活動をしていき
たいと考えております。

第五〇号という記念すべきタイ
ミングで、会報の編集に携わるこ
とができ、とても光栄に思いま
す。写真をたくさん入れ、インタ
ビューの記事をいくつか設けるな
ど、工夫をこらしたので、読み応
えのある会報となっていると思
います。

最後になりましたが、この会報
の編集に力をお貸しくださった全
ての方々へ感謝申し上げます。

編集委員

教員

澤田 淳 片山 宏行

学部三年生

石原 玲奈 加古 真理奈
清水 咲 高見 勇樹

学部二年生

安達 萌音 本堂 優也
松島 優生 坂本 七海

永本 壮一 山田 七海

橋谷 眞生子

学部一年生

北住 悠 内田 希

星野 日菜子 伊藤 幸名

金子 亜沙美 中村 優菜

朝山 麻衣子 重久 理奈

小笠原 真奈

会報 第五十号

二〇一六年三月一八日 発行

〒150-8366 渋谷区渋谷四一四―二五
青山学院大学総研ビル10F

編集 日本文学科研究室内
青山学院大学日本文学会

電話 (〇三)三四〇九―七九一七

FAX (〇三)三四〇九―八〇〇五